

潜在看護師が再就職支援講習会に
参加して復帰するプロセス

The Process of Latent Nurses Attending Outplacement Workshops and
Returning to Work

桶 河 華 代
Kayo Okegawa

聖泉看護学研究 第3巻 別刷

(2014年3月27日発行)

潜在看護師が再就職支援講習会に参加して復帰するプロセス

The Process of Latent Nurses Attending Outplacement Workshops and Returning to Work

桶河 華代^{1)*}
Kayo Okegawa

キーワード 潜在看護師, 再就職支援講習会, 女性
Key words latent nurses, outplacement workshops, women

抄録

背景 臨床現場においては、少子高齢化により看護職員の不足が深刻化している。

目的 潜在看護師が再就職支援講習会を受講するに至ったきっかけ、受講して得られたもの、講習会に望むもの、再就職への考えを明らかにすることを目的とした。

方法 再就職支援講習会に参加した看護職7名に半構造化面接を行った。

結果 再就業支援講習会に参加する看護職は、結婚や出産、育児などの理由で離職し、離職期間が5年以上であり、非常勤での復帰を希望している。講習会の受講は、復帰に躊躇するという逆効果もあるが、現場の勤を取り戻すことや刺激を受けることで復帰への効果がある。

結論 看護職においては女性が多いということから、女性のライフイベント面からの影響を検討し、潜在看護師が医療現場に復帰するために、家庭生活との両立に向けた支援がより一層求められる。

Abstract

Background The aging society and declining birth rate is causing a worsening of a shortage of nursing staff in the clinical workplace.

Objective The objective was to clarify what triggered latent nurses to attend outplacement workshops, what they gained from attending these workshops, what they expected from the workshops, and their own opinions with regards to re-employment.

Method Semi-structured interviews were held with seven nurses who participated in a lecture offering support for returning to work.

Results Nurses participating in lectures offering support for returning to work have left employment due to marriage, childbirth, childrearing, etc., and have been out of the workplace for five years or more, but tend to be looking to return to work on a part-time basis. Participation in a lecture can have the negative effect of making them more hesitant about returning to work, but can also enable them to recapture their instincts regarding the workplace, and provide a stimulus that is ultimately effective in their returning to work.

Conclusion Since the nursing profession is made up of a majority of women, it is therefore necessary to consider the impact of life events in the lives of women, and to provide a further level of support to assist women to achieve a work-life-balance.

I. 緒言

わが国の看護需給において再就業者が注目される背景には、少子化による新規学卒者の減少と近い将来の退職者の急増という労働市場一般に共通する予測がある。そのほかに、高齢社会における医療・看護サービス需要の増大と、医療の質に対する国民意識の高まりに応じた医療提供体制の確

保という状況がある。しかし、看護需給において再就業者の必要性が認識されていても、現実の再就業希望者の就業実態は必ずしも期待どおりとはいえない。なかでも重要な課題の一つは、一定の期間を職場から離れていた看護職の技術的なブランクをいかに埋めるかという問題である。離職期間の長い看護師が、著しく変化している医療、看護の情報を収集し、理解し、自分の適性を見極め

¹⁾ 聖泉大学 看護学部 看護学科 School of Nursing, Seisen University

* E-mail okegaw-k@seisen.ac.jp

るのは極めて難しく、業務に不安をもっている看護師も少なくない。また医療機関にとっても、医療の質確保の観点からすぐれた看護職を採用したいという希望が強い反面、看護職の職能や技術を医療機関が自前で育成することには経済的に限界があるため、医療機関における復職者への再教育の提供はほとんど行われていない。

潜在化対策として、賃金以外の労働時間などの就労条件の改善に配慮すべきであり、看護職員の大多数が女性であることから、出産や育児等で一度仕事から離れた人が再就労しやすい環境づくりに今後も取り組むべきである。看護職の再就職をはじめとする潜在看護師に関する研究（武村，2007；富田，2008；富安，2011）はあるものの、長い離職離間を経て再就職する看護職に照準した上で、受講した講習会から得るものや再就職をどのように考えているかを具体的にした研究はほとんど見当たらない。また、女性のキャリアパターンを考えた場合、短期離職を経て再就職する看護職よりも長い離職離間を経て再就職する看護職のほうがはるかに再就職への動機づけの調達や研修での情報提供は難しいと考える。

そこで、本研究の目的は、再就職支援講習会に参加した看護職に、半構造的面接を中心にした調査を実施し、再就業支援講習会を受講するに至ったきっかけ、受講した再就業支援講習会から得られたもの、再就職支援講習会に望むもの、再就職をどのように考えているかなどを明らかにする。長い離職期間を経て再就職するプロセスが明らかになれば、今後の再就職支援講習会の制度設計や運用を考える上での重要な資料になると思われる。

II. 研究方法

1. 調査対象

調査対象は、平成24年度にA県が主催する看護職の再就職支援講習会⁽¹⁾に参加した看護職の有資格者23名とした。

2. 調査時期およびデータ収集方法

調査期間は、平成24年11月21日再就職支援講習会終了後から平成25年8月とした。データ収集方法は、講習会最終日に研究者自身が研究の趣旨を説明し、同意の得られた看護職を対象に半構造化面接を行った。

3. 調査内容

調査内容は、対象者の属性、再就業支援講習会を受講するに至ったきっかけ、受講した再就業支援講習会から得られたもの、再就職支援講習会に望むもの、再就職をどのように考えているかなどを面接にてデータを収集する。質問内容については、研究対象者の了解を得た上でICレコーダーへすべて録音した。

4. データ分析

得られたデータをすべて逐語録に起こし、意味内容を正確に理解するために繰り返し読み、データから解釈した一定の意味のまとまりのある文を抽出しコード化した。コード間の類似例、相違例、関連性などを併せて検討を重ねサブカテゴリー、カテゴリーを生成する内容分析の手法で分析した。データ収集、分析過程において質的研究の専門家によるスーパーバイズを受け、客観性を担保した。研究協力者のうち2名にメンバーチェックングを行った。

5. 倫理的配慮

本研究は、聖泉大学の研究倫理審査委員会の承認（承認番号：3）を受けて実施した。A県看護協会の担当者には文書と口頭で研究活動への理解と協力を求め、了承を得た。調査協力者には研究の目的、方法、意義、プライバシーの保護、自由意思による参加、途中辞退による不利益は被らないことを口頭と文書で説明し、協力者の署名をもって同意を得た。対象者への面接は、プライバシーが守れ、得られたデータは個人が特定されないように配慮し、本研究以外使用しないことを保証した。

III. 結果

本研究に協力の同意が得られた看護職は7名であった。そのうち5名は研修最終日の終了後に別室で順番に15分程度の面接を行い、2名においては、協力者の指定された場所で30分程度の面接を行った。

文中の標記は、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >, コードを「 」とした。なお、個人の特定をさけるため表1には既婚、子どもの数は表記せず、表5にはAからGの順不同で表記

表1 属性

	看護職免許	年齢(歳台)	性別	通算経験年数	離職期間(年)	最後に仕事を辞めた理由
A	看護師	40	女性	10	5	三人目の出産・育児
B	看護師	40	女性	15	8	医師の指示が伝達しない不満
C	看護師	30	女性	4	12	結婚
D	看護師	40	女性	15	12	子どもの病気・育児
E	准看護師	40	女性	1	17	病院の経営難とその後すぐに結婚
F	看護師	40	女性	8	18	出産・育児
G	看護師	30	女性	2	10	出産・育児
平均				7.9 (±5.8)	11.7 (±4.6)	

した。その後、メンバーチェックを行った2名には、再就業しているのかを確認し、表5に新しい情報を追加した。

1. 属性 (表1)

看護職の7名の職種は、准看護師1名と看護師6名であった。全員が女性・既婚者(そのうち1名が離婚している)であり、2～3人の子どもをもっていた。年齢は30歳台が2名と40歳台が5名であった。経験年数は1～15年、平均が7.9(±5.8)年であった。離職期間は5～18年、平均11.7(±4.6)年であった。最後に仕事を辞めた理由については、結婚や出産、育児(子どもの病気)など家族形成に関することが5名であり、その他に医師の指示が伝達しない不満が1名と病院の経営が苦しいと言われたことが1名であった。

2. 再就業支援講習会を受講するに至ったきっかけ (表2)

再就業支援講習会を受講するに至ったきっかけは、【看護実践への不安】【家族の支援】【働く準備】の3カテゴリと<看護師として意識する><知識と技術の再確認をする><復帰する時期を模索する><家族の後押しがある><家族を養う><職業的に自立する><準備を進めていた>の7サブカテゴリが抽出された。

1) 看護実践への不安

【看護実践への不安】カテゴリには、<看護師として意識する><知識と技術の再確認をする>の2サブカテゴリがある。

「結局、なんか看護とはつながってほしい」や「人のためになることをしたいと思った」というように復帰するなら看護職を考えているようであった。しかし、復帰するにしても、「すぐには自信がない」ので、こういった研修に参加して、<看護師として意識する>ことを望んでいた。<看護

師として意識する>ためには、「気持ちや技術の面で慣らしたい」や「何も知らないでは、自分に対しても病院に対しても申し訳ないと思う」、「緊急時の対応はお願いしますと言われた」というように看護職の責務を考えると不安もあり、<知識と技術の再確認をする>ことを求めていた。よって、研修を受けるきっかけは、<看護師として意識する>こと、そのためには<知識と技術の再確認をする>ことであり、【看護実践への不安】がきっかけとなっていた。

2) 家族の支援

【家族の支援】カテゴリには、<家族の成長を見極める><家族の後押しがある>の2サブカテゴリがある。

「もう出産はないので、今度は腰を落ち着けてではないですが」や「下の子どもが中学校を上がってから復帰しよう」と、「優先順位が仕事にきてしまう性格なので、ジレンマで、今のバランスを保ちたいという思いがあって」というように、自分の気持ちは復帰しようという意欲はあるものの、<家族の成長を見極めて>いる状況であった。反対に、家族も成長しており、「子どももお母さん看護師だよっていうのを知っていて、働いたらって言ってくれた」、「夫が背中を押したというか、行けと言ったので。もともと、仕事が好きだったので、夫からみると、家を出ろって言うんです」というように、看護職に復帰することに対して<家族の後押しがある>状況でもあった。そういう意味では、主婦として<家族の成長を見極め>ながら、<家族の後押しがある>ことを確認できたので、【家族の支援】が受講するきっかけとなっていた。

3) 働く準備

【働く準備】カテゴリには、<家族を養う><職業的に自立する><準備を進めていた>の3サブカテゴリがある。

表2 再就業支援講習会を受講するに至ったきっかけ

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
看護実践への不安	看護師として意識する	結局なんか看護とはつながっていたいというのがあって
		なので、自分がやりたいというか、人のためになることをしたいと思ったので 気がつけば5年たっているの、すぐに就職には自信がなかったの
	知識と技術の再確認	気持ちや技術の面で慣らしたいという思い
		何も知らないでいくのは、自分に対しても、病院に対しても申し訳ないと思ったので 看護師の方に要求したいのは危険なとき、詰ませたとき、重篤な時の判断が必要なお返ししますと言われた、そういう不安があって
家族の支援	家族の成長を見極める	もう出産はないので、今度は腰を落着けてではないですが とりあえず下の子が今、中学校1年生なんですけど、中学校を上がってからと復帰しようと ばっと仕事に行く性格なので、優先順位が仕事にきてしまう性格なので、ジレンマで、今のバランスを保ちたいという思いがあって。すごく気持ちが、行ったり来たりしながらきてたんですけど
		家族の後押しがある
	家族を養う	
		職業的に自立する
準備を進めていた	就労説明会にちょこちょこ行って、今後情報というところに丸をして 私も何もわからないから、なんか研修がないかなとパソコンで調べていたんです	

「子どもも大きくなってきて、金銭的にお金もかかってくる」や「子どもも自分で養っていかなければならない」というように＜家族を養う＞ことを視野に入れていた。そのために、「いきなり専業主婦になった瞬間に、旦那の付属物みたいで自分じゃないみたい」、「ブランクがあるからと幅を狭めたくなくて、こういうところでちょっとでも自信が持てたら、間口が広がるんじゃないかと思って」というように＜職業的に自立する＞ことを考えていた。そういう気持ちもあって「就労説明会にちょこちょこ行って、今後情報というところに丸をして」、「私も何もわからないから、なんか研修がないかなとパソコンで調べていた」というように＜準備を進めていた＞。よって、研修会への参加は、＜家族を養う＞＜職業的に自立する＞ことを考えており、＜準備を始めていた＞ところにタイミングが合い、【働く準備】として受講していた。

3. 受講した再就業支援講習会から得られたもの(表3)

受講した再就業支援講習会から得られたものは、【勤を取り戻す】【輪が広がる】【自己研鑽の必要性】の3カテゴリーと＜看護に対する意識を高

める＞＜向学心に溢れる＞＜医療安全に対する意識を高める＞＜連帯感が生まれる＞＜孤独でなくなる＞＜複雑な気持ちになる＞＜不安が顕在化する＞の7サブカテゴリーが抽出された。

1) 勤を取り戻す

【勤を取り戻す】カテゴリーには、＜看護に対する意識を高める＞＜向学心に溢れる＞＜医療安全に対する意識を高める＞という3サブカテゴリーがある。

「白衣は貸してもらって、靴は自分の。それで私たち聞いてなかったから、白のストッキングはいていったんです。で、今は、白いストッキングいらんよって言われて」と白衣ひとつをとってみても時代の変化を実感していた。「講師の先生もなんか、ブランクもね、キャリアなんだよって」、「イメージでもっていた看護より、地に足がついた感覚にはなりました」、「行ってよかったなって、一回ごとになんかしら少しずつ目が覚めていくとか」というように潜在能力を引き出す講義内容であり、「訪問とかやってみたいような気付きつつはあるんですけど」という前向きな姿勢になり、＜看護に対する意識を高める＞結果となっていた。

「どうしても家にもできないことが、短い

時間でこれだけは知っておきなさいって与えてもらうのですごく役に立つ」、「お金を払わずに、これだけ色々受けさせてもらって、面白い先生の話きけて」、「すごくいい雰囲気、すごい質問もして」というように自己研鑽ができたことで＜向学心に溢れて＞いる様子であった。

また、「新しい薬剤の使い方や変化がわかって、具体的に病院に実習に行くとき最新のすごく密な感じ」、「点滴をバーコードでピッとしていたりして、おおっと思ったりしました」というように医療に関する変化を感じながら、＜医療安全に対する意識を高める＞ことにつながっていた。研修を受けることで、＜看護や医療安全に対する意識を高め＞、＜向学心に溢れる＞結果となり、病院での実習を経験することで【勘を取り戻す】結果となっていた。

2) 輪が広がる

【輪が広がる】カテゴリーには、＜連帯感が生まれる＞＜孤独でなくなる＞という2サブカテゴリーがある。

「この場で知り合って、実習もたまたま一緒だったんですけど」、「席が隣になって、いい方だったので、都合合わせて実習場所を同じにしたんです」というように仲間を意識して、＜連帯感が生まれてきた＞。また、「こっちにきているので、看護師の友達がいなかったので友達ができたので心強く励みになりました」と同士に知り合う場となり、＜孤独でなくなつて＞いた。研修を受けることで、＜連帯感が生まれて＞、＜孤独でなくなり＞、【輪が広がる】結果につながっていた。

3) 自己研鑽の必要性

【自己研鑽の必要性】カテゴリーには、＜複雑な気持ちになる＞＜不安が顕在化する＞という2サブカテゴリーがある。

「やっぱり10年のブランクが最新のお薬だとか(途中略)もっともっと勉強が必要だと思いました」、「そういう感じ(余計に不安)になって、どっちがよかったんかなって思います。でも研修はあったことはとてもいいことだと思います」というように＜複雑な気持ちになっている＞。そして、

表3 受講した再就業支援講習会から得られたもの

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
勘を取り戻す	看護に対する意識を高める	白衣も貸してもらって、靴は自分ので。それで、私たち聞いてなかったから、白のストッキングは買っていったんです。で、今は、白のストッキングいらんよって言われて(笑)昔のイメージで講師の先生方もなんか、ブランクもね、キャリアなんだよって、そのへんのところはほんやり過ごしてきたわけじゃないんだと自分でも感じました
		認定の方に講義とかしていただいて、逆にイメージでもっていた看護より、地に足がついた感覚にはなりました
		やはり聞いてみると訪問とかやってみようみたいな気づきつつはあるんですけど
	向学心に溢れる	行ってよかったなって。一回ごとになんかしら少しずつ目が覚めていくというか
		もう、やはり久しぶりに変わってきているんだと思って。どうしても家にいてもできないことが、短い時間でこれだけは知っておきなさいって与えてもらうのですごく役にたったと思います
		でも、すごく、手厚いと思いますね、他の職種とかでは仕事さえ探してもないのに、看護職は高齢化もあってここまで恵まれますね。お金払わずに、これだけいろいろ受けさせてもらって、面白い先生の話きけていいですよ
医療安全に対する意識を高める	あの、すごくいい雰囲気、すごい質問もして実習でもやっていて、実習先の方も楽しかったですとみんなが積極的なのでと言って下さって。あれもこれも、自分もこう活発にわからないことも解決して帰って来れたし、いい雰囲気	
	でも、やっぱり、現状の変化とか、新しい薬剤の使い方や変化がわかって、具体的に病院に実習に行くとき最新のすごく密な感じで	
輪が広がる	連帯感が生まれる	大きな病院にいったんですけど、点滴をバーコードでピッとしていたりして、おおっと思ったりしました
	孤独でなくなる	はい、この場で知り合って、実習もたまたま一緒だったんですけど
		はい、たまたま、席が隣になって、いい方だったので、都合を合わせて実習場所を同じにしたんです
自己研鑽の必要性	複雑な気持ちになる	研修に参加することでママ友とは違う、仲間ができたとういうことですか。私自身が妻や母親だけの時は、自分の存在が社会的にはないような孤独感に陥りました
		結婚して、こっちにきているので看護師の友達がなかったので友達ができたので、心強くはげみになりました
	不安が顕在化する	ここを受けて、やっぱり10年のブランクが最新のお薬だとか、実際に病院に実習に行かせてもらって、専門のナースがいるのを知って勉強になりましたし、もっともっと勉強が必要だと思いました
		でも行ったら行っただ、そういう感じ(余計に不安)になって、どっちがよかったんかなって思います。でも、研修があったことはとてもいいことだと思います
		何もわからなくて、ナースセンターの研修に参加していなかったら、私は普通に求人とかを見て、ここよさそうだし電話しようって、電話していたと思うんですよ。でも、行ったがために、言葉悪いですが、講習受けて、実習に行っているんな現場を見るとさらに不安になってしまった

「研修に参加していなかったら、私は普通に求人とかを見て、ここよさそうだし電話しようって、電話していたと思うんですよ。でも、行ったがために、言葉悪いですけど、講習受けて、実習に行っている現場を見るとさらに不安になってしまった」というように＜不安が顕在化＞してしまった。研修を受けて、＜複雑な気持ちになり＞、＜不安が顕在化＞することで復帰を躊躇し、【自己研鑽の必要性】をより実感する結果であった。

4. 再就職支援講習会に望むもの（表4）

再就職支援講習会に望むものには、【実践力を高める】【情報を得る】の2カテゴリーと＜実習を重視した内容にする＞＜臨床の場で生かせる技術を習得する＞＜情報をタイミングよく提供する＞＜交流する場を設ける＞の4サブカテゴリーが抽出された。

1) 実践力を高める

【実践力を高める】には、＜実習を重視した内容にする＞＜臨床の場で生かせる技術を習得する＞の2サブカテゴリーがある。

「会話をするのもなかったもので、そのへんに対しては、不安は残るといのはありますね」と実際に患者さんとのコミュニケーションを取れることを希望していた。また、「呼吸器をわりとしてほしかったので、呼吸器ですかね。療養系が好きでそっちに行きたいと思っていたので、最近どこでも呼吸器は取り扱っているの、最新の呼吸

器の取り扱いを教えてほしかったですね」というように最新の医療技術の取扱いを学ぶことを目的に持っていた。コミュニケーションや医療機器など就職先に合わせたニーズをもっているのだから＜実習を重視した内容＞を増やしてほしいということであった。「実習に行ったんですけど、採血とかの実施がなかったので、そっちの方が不安なのであったほうがよかったです。人形とかでも何でもいので、やれたらよかったんかなって」というように医療技術に不安をもっているのだから＜臨床の場で生かす技術を習得する＞ことを望んでいた。再就職支援講習会に望むものとして、＜実習を重視した内容＞を行うことにより＜臨床の場で生かす技術を習得し＞、【実践力を高める】内容を期待していた。

2) 情報を得る

【情報を得る】には、＜情報をタイミングよく提供する＞＜交流する場を設ける＞という2サブカテゴリーがある。

「実際、実習に入る前にどこを選んだらいいのか、実際に就職先になるかもしれないし、だからもう少し、一回説明会だとか、再就職のイベントがはさまっていたら、もうちょっとなんか絞れたのかな」、「立ち話を聞いて、ここがよさそうなんですねとか思ったんですけど、相談コーナーとか20分くらいでも設けて、自由に相談できたらいいかもしれないですね」というように実習に行く前に情報があれば、そのまま就職につながる可能性

表4 再就職支援講習会に望むもの

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
実践力を高める	実習を重視した内容にする	<p>会話をするのもなかったもので、そのへんに対しては、不安は残るといのはありますね</p> <p>もっと厳しくというか潜在の方ですよっていった感じで遠慮した講義をしてはる方もいたので。みんな一定の現場を経験してブランクあってきているけど、もっとばんばん厳しくしてもらってもよかった。自分としてはね、もっと体を使うこともしてほしかった</p> <p>(人工)呼吸器をわりとしてほしかったので、呼吸器ですかね。療養系が好きでそっちにいきたいと思っていたので。最近どこでも呼吸器は取り扱っているの、最新の呼吸器の取り扱いを教えてほしかったですね</p> <p>フィジカルアセスメントの講義が全部一日ばっとならったんですけど、二日に分けてじっくりやってもらった方がいいかな</p>
	臨床の場で生かせる技術を習得する	<p>実習でモデルを使って採血をしたりだとか、血糖測定とか実際にさせてもらったので、ほかの人はやれなかったときいたんですけど、私が行かせてもらったところはそれができたので</p> <p>実習にいったんですけど、採血とかの実施がなかったので、そっちの方が不安なのであったほうがよかったです。人形とかでも何でもいので、やれたらよかったんかなって</p>
情報を得る	情報をタイミングよく提供する	<p>実際、実習に入る前にどこを選んだらいいのか、実際に就職先になるかもしれないし、だからもう少し、一回説明会だとか、再就職のイベントがはさまっていたら、もうちょっとなんか絞れたのかな</p> <p>立ち話を聞いて、ここがよさそうなんですねとか思ったんですけど。相談コーナーとか20分くらいでも設けて、自由に相談できたらいいかもしれないですね</p>
	交流する場を設ける	<p>昼からみんなで、話す機会があってもいいですね</p> <p>講義を受けて家に帰ってもなかなか勉強できないので、後ろに教科書とか置いてあるなら、そこで調べたり、読んでいたりとかそういう時間が必要かと思いますね</p>

があると考えており、＜情報をタイミングよく提供する＞ことを希望していた。また、「昼からみんなで、話す機会があってもいいですね」や「講義を受けて家に帰ってもなかなか勉強ってできないので、後ろに教科書とか置いてあるなら、そこで調べたり、読んでいたりとかそういう時間が必要かと思いますね」というように＜交流する場を設ける＞ことで情報の交換ができることを希望していた。個々の目的を知ることや実習施設の内容を把握し、＜情報をタイミングよく提供する＞こと、また自己学習や相談ができる＜交流する場を設ける＞ことで、就職につながる【情報を得る】ことを望んでいた。

5. 再就職への考え（表5）

再就職をどのように考えているかという質問に対して、復帰に躊躇しながらも就職先を探しており、前向きな様子であった。再就職支援講習会終了後の就職先は、事務職が1名、小規模多機能施設の看護師が1名、保育所看護師が1名、病院の看護師が1名と決まっていた。訪問看護師を希望している方が1名、ワークライフバランスを考えて探したい方が1名で、夜勤ができるように2年程子どもの成長を待つという方が1名であった。ほとんどの方が、夜勤をしなくて済むように非常勤を希望し、就職先を決めていた。

表5 復帰に向けて（順不同）

訪問看護師希望（非常勤）
家庭に支障のない働き方を希望（非常勤）
事務職に就職
小規模多機能施設に就職（非常勤）
保育所看護師に就職（非常勤）
病院に就職（非常勤）
子どもの成長後探す

IV. 考 察

本研究は、再就職支援講習会に参加した看護職に、半構造的面接を行い、再就業支援講習会を受講するに至ったきっかけ、受講した再就業支援講習会から得られたもの、再就職をどのように考えているかなどを明らかにする目的で、今後の再就職支援講習会の制度設計や運用を考える上での基礎的な資料にする意義があると考えられる。その

ために、再就職支援講習会を受講するに至ったきっかけ、講習会から得られたもの、講習会に望むもの、再就職への考えという結果に分けて考察していく。

1. 再就職支援講習会を受講するに至ったきっかけ

一般に女性労働者の年齢階層別の労働力率（15歳以上人口に占める労働力人口の割合）をグラフに表すと、30歳台前半をボトムとするM字カーブを描くことから、女性労働者の働き方をM字型曲線といわれる。M字型曲線は1960年代後半からみられるようになり、日本女性の働き方の特徴で、ノルウェー、スウェーデン、アメリカは逆U字型を示している。日本のこの現象は、結婚・出産・育児の期間は仕事を辞めて家事・育児に専念し、子育てが終了した時点で再就職するという女性のライフスタイルの現われであり、看護職においても同じことがいえる。公益社団法人日本看護協会の調査（2012）によれば60か月以上の離職期間があれば、半数を超える53.9%が再就業支援講習会を受講しており、今回の対象者においては子どもの年齢や離職期間が5～18年と長いことからあてはまる。換言すれば、子どもたちが一定の年齢（末の子どもが就学）に達した段階で再就職するのを逸した人たちであったか、夫の所得などが高くそのタイミングで再就職をする必要がなかった人たちであったか、復帰するタイミングで出産や子どもが多い理由で再就職できなかった人たちかもしれない。長期に現場を離れていたことで、今の現場がどうなっているか、復帰してもやっていけるのか、家庭と仕事を両立できるのかなどの復帰に向けた不安な状況が浮かび上がっている。このように、復帰できない理由や不安が多岐に渡っていることから、できる限り負担がかからないような形態で復帰したいと考えており、講習会の参加にあたっては、【看護実践への不安】、【家族の支援】、【働く準備】に力点が置かれたと考える。

2. 受講した再就職支援講習会から得られたもの

宮崎（2012）は、免許を持つ看護人材のうち看護職として就業していない潜在者数や潜在率について、先行研究（中田、宮崎、2007）に続き最新

データを用いて2010年末時点まで推計方法を改めて見直した。推計結果は、潜在看護人材数は63万人、潜在率は31.6%であり、潜在率の低下傾向が続いていた。ただし、近年の若い世代では婚姻率の低下に歯止めがかかった中で看護職就業率が上昇していたことが要因となっている。そして、就業支援施策の取り組みも比較的進んでいることも報告している。その取り組みのひとつに再就職支援講習会があり、講習会に対する評価も報告（公益社団法人日本看護協会の報告、2012）されている。その報告によると、研修会に参加して「とても役にたった」が67.0%、「少し役にたった」が28.6%、「役にたなかった」が1.8%、「わからない」1.0%であり、合わせて9割以上（95.6%）の看護職が役にたったと回答していた。それは、本研究結果である＜看護に対する意識が高まる＞＜向学心に溢れる＞＜医療安全に対する意識を高める＞ことで、現場で働いていた時のような【勤を取り戻す】ことができたことからもうかがえる。また、妻や母親以外の友達ができたと＜連帯感が生まれ＞、＜孤独でなくなる＞ことで、【輪が広がった】ことから役にたったと考えられる。しかし、講習会に参加することで、＜不安が顕在化し＞、＜複雑な気持ちになる＞ことで【自己研鑽の必要性】を実感し、職場復帰に対して躊躇するという逆効果も聞かれた。この結果は、「役にたなかった」や「わからない」という少数意見を具体的に抽出したものであると考えられる。よって、＜不安が顕在化し＞＜複雑な気持ちになる＞が抽出されたことは、今後の講習会には、こういう点も考慮して内容を考えていく必要があると示唆された結果といえる。

3. 再就職支援講習会に望むもの

一定の期間以上に家庭での主婦としての生活は、子どもや自分が病院に行くことを除けば医療や看護に関わることがなく、白いストッキングが必要でないという情報さえ得ることができていない状況であった。また、夫の扶養で子どもを育てることが可能な経済力があることも想定される。そういう状況の長期離職者に医療現場の状況や看護体制、制度の変化等を厳格に運用されるようになったことを一方的に強調しすぎると、長期離職者の不安は増大していく。したがって、現実の変化や情報提供を与えると同時に、それらにいかに対処

するかの方法を教えていく必要もあり、実際に対処できるように自信をつけていくような講習や実践の場が必要になる。そういう時代背景を含めて、不安が増大してしまうことを理解し、自己学習や情報交換する機会を提供する【交流する場】を設けることも解決策につながるのではないかと考える。長期離職者であることは、言い換えれば子どもにそれほど手がかかるわけではない。強制ではなく自主性を尊重するサポート体制も必要である。

具体的には、スケジュールを確認すると午前中しかない講義の日がある。その午後からを学習する時間として教科書の提示や実習先の演習内容の説明をすることで、自己学習する意欲が増すと考える。希望する内容は、【実践力を高める】【情報を得る】ことであった。【実践力を高める】ためには、＜実習を重視した内容にする＞、＜臨床の場で生かせる技術を習得できる＞ことが望まれた。そのためには、モデル人形を使って技術やフィジカルアセスメントを習得することが必要になる。病院の実習だけでなく看護専門学校や看護大学と連携して実習室やモデル人形を利用できるような体制を考えていくことが重要である。今後はナースセンターと病院・施設、教育機関である看護専門学校や看護大学が連携し、共同で看護学生や潜在看護師の教育に取り組むことが望まれる。

4. 再就職に向けての考え

「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業の考え方に対しては、特に若い世代ほど反対する人が多くなって、従来の固定的な役割分業を支持する意識は薄れつつある（内閣、2012）。また、男女雇用機会均等法や育児休業法などの制度により女性が仕事を持つことに対する理解が進み、男性にも家庭を重視する意識がみられるようになった。しかし、実際には、男性は仕事を優先せざるを得ない状況にあり、女性に対して仕事より育児の優先を求める性別役割分業の考え方が根強く残っていることが示された結果ともいえる。

30歳以上有子率を比較した調査（厚生労働省）によれば、看護職の有子率が一般女性の有子率を上回っており、看護職の多くは「働く母親」といえる。それは、看護職には時間短縮勤務や夜勤免除、院内保育所の整備などといった働き続けることを可能にするワークライフバランスに関する取り組みが行われつつある。また、再就業支援研修

が、「働く母親」を増やす一助になっているとも考える。介護保険法が始まって以降、福祉系の施設への就職が増え、パートタイム就業の求人先も様々にあり選べる状態になった。それは、今回の講習会終了後に小規模多機能施設や保育所、病院などに非常勤で就職先が決まっていることから確認できる。今後、少子化が進展する社会において、将来の労働力不足は目に見えており、女性の就労は期待される。看護職においては女性が多いということから、女性のライフイベント面からの影響を検討し、潜在看護師が医療現場に復帰するために、家庭生活との両立に向けた支援がより一層求められる。

V. 結 語

女性のキャリアパターンを考えた場合、「短期離職を経て再就職する女性（看護職有資格者）」よりも「長い離職離間を経て再就職する女性（看護職有資格者）」のほうがはるかに再就職への動

機づけの調達や研修での情報提供は難しい。長期に現場を離れていたことから環境は激変しているために不安も大きいし、そもそも働かずに何とか生活できる人たちである可能性もある。また家庭を優先したいと考える女性が多いと予想されるため、是が非でも再就職という動機づけの調達は難しい。ということから講習会の内容や運営は、こうしたきめ細やかなそれぞれの不安に寄り添いながら運営していく講習こそが求められている。今後の再就職支援講習会の制度設計や運用を考えていくことが、潜在看護師が復帰する鍵であると思われる。

謝 辞

本研究に快くご承諾いただきましたA県ナースセンターの皆様、ならびにご多忙中、調査協力くださいました看護職の皆様に心からお礼申し上げます。

補注（1）A県看護協会ホームページ掲載の一部抜粋
平成24年度 看護職の再就職支援講習会プログラム
1. 講義（看護研修センター）

日 程		研修内容
曜日	時間	
9月4日（火）	9：30～11：00	開講式・オリエンテーション・看護の動向
	11：00～12：30	病院における看護部門の役割および看護職員の役割
9月6日（木）	9：30～12：30	看護職に必要な薬剤の知識 （よく使われる薬・取扱い方・留意点）
9月18日（火）	9：30～11：00	感染管理
	11：00～12：30	医療安全（医療事故防止）
9月20日（木）	9：30～12：30	フィジカルアセスメント（呼吸器）
	13：30～16：30	フィジカルアセスメント（循環器）
11月21日（水）	9：30～10：30	精神病院における看護職の役割
	10：30～11：30	訪問看護ステーションにおける看護職の役割
	11：30～12：30	介護保険施設における看護職の役割
	13：30～15：00	再就職に向けて・グループワーク・閉講式

2. 実習（病院）

日程	内容	場所
原則として3日間 実習施設が指定した日 10月1日～ 11月20日	≪オリエンテーション≫ ・看護の概要 ≪病棟・外来での実習≫ ・病棟・外来での実習について ◎看護技術（採血、注射、輸血、褥創等） ◎院内感染防止 ◎医療事故防止 ◎救急時の看護、AEDの取扱い ・患者参画の看護の展開 ・看護職が扱う医療機器の取扱い ・電子カルテ・看護記録・オーダーリングの実際 * 実習医療機関により内容は一部変更がある。 * ◎は必修項目である。	実習場所は、協力医療機関とする。（後日調整） * 受講生在住の地域にある、または、近隣にある医療施設で実施。

※希望により随時就業相談を致します。

文 献

- 甲斐野智子, 金谷祐美子, 橋崎裕幸, 松本香織 (2008):
潜在看護師をいかに復帰させるか, ISFJ日本政策
学生会議「政策フォーラム2008」発表論文.
- 株式会社ビースタイル (2011): 「出産後は早く仕事
に戻りたい!」過半数が未就学児のうちに仕事復帰
を希望 働く意欲のある主婦層へのアンケート～子
育てへの理解とパートタイムで出来る仕事の創出が
復帰の課題～: 「しゅふ活研究室」調べ.
- 公益社団法人 日本看護協会 (2012): 平成24年都道
府県ナースセンターによる看護職の再就業実態調査
報告書.
- 厚生労働省 (2012): 平成23年版 働く女性の実情 (概
要版).
- 厚生労働省 (2010): 平成22年雇用動向調査結果の概
要.
- 厚生労働省: 潜在看護職員の再就業意向 総務省
「2005年国勢調査報告」(一般女性), 日本看護協会
「2005年看護職員実態調査」(看護職) 15 - 16.
www.mhlw.go.jp/shingi/2009/11/dl/s1104-3-p-0002.pdf
- 宮崎悟 (2012): 看護人材の就業率の推移ー再検討し
た潜在者数推計方法による結果からー, 同志社大学
技術・企業・国際競争力研究センター (ITEC) ワー
キングペーパー12-04.
- 宮崎悟, 中田善文 (2008): 看護職員の潜在化と労働
条件: 看護師不足解消に向けての論点提案, 同志社
大学 技術・企業・国際競争力研究センター
(ITEC) ワーキングペーパー08-08.
- 中田喜文, 宮崎悟 (2007): 日本における潜在看護師
数の推定と年齢・コーホート効果への分析, 同志社
大学 技術・企業・国際競争力研究センター
(ITEC) ワーキングペーパー07-01.
- 内閣府 (2012): 男女共同参画社会に関する世論調査.
武村雪絵 (2007): 潜在看護師の再就業をサポート
「Re - ナース」プラン, 月刊ナーシング, 27 (13),
92 - 97.
- 富田昌代, 井上裕美子, 長見充彦, 台野悦子, 内藤正
子 (2008): 潜在看護師復帰支援講座実施から得た
課題とカリキュラムの構築, 看護管理, 18 (2),
118 - 125.
- 富安真理 (2011): 潜在看護師の自己効力感を強化す
る訪問看護継続教育プログラムの開発とその評価研
究, 科学研究費補助金研究成果報告書, 基盤研究
(C) 2008~2010.